

山口農試だより

グリーンウェーブ

9 号

平成11年3月
山口県農業試験場
山口市御堀1419
TEL (0839) 27-0211
FAX (0839) 27-0241

環境にやさしい農業を目指して

私たちの生活は、文明の進歩とともに大変便利になりました。農業においても、機械や肥料・農薬などのおかげで、昔に比べずいぶん楽に生産できるようになっています。

しかし、一方では、弊害として大気や水の汚染、地球の温暖化など、多くの問題が起こるようになりました。

そのため、環境保全に対する関心や、良質で安全な農業生産物を求める声が高まっています。



茶園における環境負荷軽減土壌管理技術



フェロモンを利用した減農薬防除技術



有機物資源の効率的利用（トマトの堆肥施用技術）



このような要望に応えるため、農業試験場では、農業が環境に与える害を少なくするための施肥技術や資源のリサイクルによる地力の維持・増進技術、安全な病虫害防除技術などの開発を行っています。

環境部長 安 楽 又 純

土壌病害の 新たな防除技術の 開発に向けて

2005年で使用の全廃が決定しています。このため、早急に臭化メチル剤に代わる新しい防除薬剤の探索や防除技術の開発が必要であり、県内で問題となっているハウレンソウ萎ちょう病、メロンえそ斑点病などを対象に取り組んでいます。

ハウレンソウ萎ちょう病

ハウレンソウ萎ちょう病は、土壌中のカビ（フザリウム）によって引き起こされる病害で夏期の栽培で最も問題となります。

本病については、土壌中の有用微生物（拮抗菌）を用いた防除法や移植栽培による発病回避技術、新薬剤の探索等について検討しています。



新薬剤の探索（テープ剤）

メロンえそ斑点病

メロンえそ斑点病は、土壌中のカビによって媒介されるウイルス病であり、最も防除技術の開発が急務とされる病害のひとつです。

農業試験場では、接ぎ木栽培に着目し、「ニューメロン」等を台木として利用すれば発病を抑制できることを明らかにするとともに、農薬や各種防除資材について検討を行っています。

メロンえそ斑点病とモザイク病の見分け方

えそ斑点病は土壌伝染性、モザイク病はアブラムシ伝染性の病害で、ともに施設の出入り口で発生しやすい。えそ斑点病では葉脈がえ死しますが、モザイク病では葉脈は退色し葉脈の周辺がえ死します。両病害とも新葉に小さな斑点を生じますが、えそ斑点病では中央部がえ死し褐色となります。えそ斑点病では、地際に鳥足症状がみられる場合があります。

（病害虫研究室 井上 興）



葉脈がえ死



葉脈の縁が退色

創設50周年行事を開催



平成10年9月18日に大島柑きつ試験場で、創設50周年記念行事を開催しました。当日は県内の柑橘生産者を中心に480人の来場者で賑わいました。

午前中には、「21世紀に向けた柑橘経営のために」をテーマにしたパネルディスカッションを行いました。(写真右)

独自の理念で経営成果を上げておられる県内の柑橘生産者5人の方から、①有望品種の選定・導入と品種構成、②高品質連年生産のための栽培管理の方法、③園地整備及び省力機械の導入利用による作業体系について、の話題提供や意見発表がなされ、会場の参加者からも活発な発言がありました。

新技術展示コーナーでは、当試験場で成果の上がった新しい技術30課題を紹介しました。これらの技術は生産性の向上につながるため、生産者の方々への普及が期待されております。また、「大島郡柑橘振興協議会・展示コーナー」では、柑橘園地の現況及び改善状況、そして農家の意向調査に基づいてまとめた産地再整備案を展示しました。これは産地の改善を具体的に実施する手法として、高い関心を集めていました。

午後からは、場内の研究圃場を公開しました。話題の新品種や省力貯蔵方法の展示や自在型スプリンクラーをはじめとする省力防除機械の作業実演を関係団体やメーカーの協力の下に行いました。(写真左下)



当記念行事が、多くの機関や団体のご協力とご支援を受けて開催が出来ましたことを感謝いたします。当日ご来場の方々の柑橘への夢と意欲を強く感じ、皆様と共々歩み続けるための貴重な一日でありました。

(大島柑きつ試験場 森重定昌)



環境にやさしく 病虫害防除

病虫害研究室の巻

病虫害研究室では、水稻、野菜、花き、果樹等の幅広い農作物を対象に、病虫害の発生生態の解明や防除技術の開発、実用化等の研究を行っています。

特に、近年では、拮抗菌、弱毒ウイルス、フェロモン、天敵昆虫等の有効活用や、臭化メチル代替防除技術の実用化等の環境にやさしい病虫害防除の研究に力を入れています。

また、ホタルやメダカ、トンボの住めるきれいな小川や湖沼など、農地周辺の多様な環境の保全にも配慮したいと考えています。

私たちはこれからも、21世紀に向けた新たな農業の発展のために頑張っていきます。

(病虫害研究室 河村 俊和)



養液栽培検討会の開催

農林部経営普及課と共催で「養液栽培検討会」を開催し、生産者、農協、行政関係者100名の参加を得ました。

この検討会は、県下各地で広がりつつある養液栽培の情報交換を目的として開催されたもので、試験場としては初めての取り組みでした。

参加者には、試験場が現在取り組んでいるイチゴのNFT栽培、ネギの湛液栽培、ガーベラのロックウール栽培のハウスを見学していただきました。

また、県、メーカーからの情勢報告や現地で養液栽培に取り組んでおられる生産者の方から事例報告をいただきました。

意見交換の場では、今後の研究内容、取り組みに参考になる意見が数多く出されました。

試験場では、今後とも現地に即した研究に取り組んでいきます。

(野菜研究室 内藤雅浩)